

東京ワークショップを終了して

はじめに

今回の ICID 協会の会報は、東京ワークショップの特集としました。東京ワークショップは、2000 年 7 月 22 日から 28 日まで、水道橋のカンフェランスセンターで開催され、当初の目的を達成し終了しました。この会議の開催に当たり、会員・法人会員の皆様に御協力を頂きましたことについてお礼申し上げます。おかげ様で、ICID 協会は、会議開催に多大の貢献をすることが出来ました。

東京ワークショップ開催の経緯

東京ワークショップについては、これまで度々紹介されていますが、スタートは 3 年前にさかのぼります。もともと ICID の中に、地域部会としてアジア・アフリカ地域部会がありましたが、1996 年からアジアとアフリカに分け、アジアについては、アジア地域部会を立ち上げ活動することになりました。1997 年、オックスフォードで開かれた執行理事会 (IEC) におけるアジア地域部会で、当面の活動として、毎年開催される執行理事会とあわせ、1998 年に「インドネシア・バリで最後のアジア・アフリカ地域会議」、2001 年に「韓国ソウルで第 1 回アジア地域会議」の予定が立てられました。また、1998 年から 2001 年の間、日本から「灌漑排水の持続的発展を目的としたワークショップ」と台湾で「何等かのワークショップ」を開催することが提案されました。日本は 1999 年、台湾が 2000 年ということでしたが、1998 年のバリ会議で、台湾が 2000 年を辞退したことから、2000 年に東京でワークショップを開催することが固まってきました。

2000 年にワークショップを開催することは、アジア地域部会として、1998 年から 2001 年の第 1 回のアジア会議まで 3 年という期間があるので、その間に何等かの活動をしたいという希望があったためでもあります。また、マレーシアがアジア会議の事務局を引き受け、韓国は執行理事会と第 1 回のアジア地域会議を開催することから、日本としてはワークショップを受け、アジアグループに何等かの貢献をするという意味もありました。

特記すべきこと

今回のワークショップの概要は、この会誌にある通りですが、特記したいことは、ICID 会長バートシュルツ氏とタテ事務局長が来日したことです。会長は、ICID 活動の近況、ダムに関するポジションパーパー、そして、ICID のアジアにおける意義を挨拶の中で述べられました。また、日本から構造改善局佐藤次長が、「日本における水田農業の現状」について基調講演をされました。講演は、パワーポイントにより沢山写真やグラフを使ったビジュアルなもので、アジアモンスーンの代表の方々に強い印象を与えました。水田農業の発展してきた歴史と現状に則り、「食料、農業・農村基本法」の目指す方向から、水田農業の

多面的機能、アジアモンスーン地域の水田灌漑技術の将来について述べられました。そして、ワークショップの結論として、最終日に東京宣言が纏められたことも意義あることだと思います。宣言を纏めるため、前日の夜、各国の代表者による打ち合わせが行われ、最終日に備えました。しかし、会議では、多くの議論が出て修正することになりましたが、基本的には原案に沿った形で纏められました。この中で注目すべきことは、アジア農業の持続的発展のため、水田を生産基盤としてだけでなく、水田の特殊性、つまり水田が「多面的機能」を持っていることを明確にし、水田の洪水抑制機能、生態系形成機能、水質改善機能や農村活性化機能を評価し強化することが課題とされたことです。今後、日本は、WTO の場において世界を相手に農産物自由化交渉を再開しなければならない時、水田の多面的機能のようなものが、アジアの国々においても認識されることは重要なことだと思います。この東京宣言は、会議終了後、日本の記者グループに対し発表されるとともに、ICID の中では、ICID ジャーナルに全文が発表されました。また、10 月開催されたケープタウンのアジア地域部会で、東京ワークショップの成果を発表すると共に、会議の内容と東京宣言の冊子が ICID 加盟国に配られました。このような成果があったのは、会議を取り仕切られた議長、コメンタターやコーディネータ、及び会議に参加され論文を発表された方々を始めとする内外参加者、更に、周到に会議を準備された事務局の努力の結果です。

最後に

この会議を開催するに当たり、ICID 協会は、ICID に関する日本語と英文のパンフレットを作り、その中で特別会員の名簿を掲載しました。また、特別会員の方に会議参加の御案内をした結果、22 社 26 人の方に出席して頂きました。更に、最終日には、エドモントホテルにおいて ICID 協会主催で晚餐会を開催し、120 名の方が参加され各国代表との親交を深めることが出来ました。

これからも、日本国内委員会に協力しつつ、民間の立場から ICID 活動を行っていきたいと考えますので、会員、法人会員の皆様の御協力を御願います。